

# 真理に関する第三の道について

—— 實在論の世界の實在論的でない部分への反省 ——

野 中 克 美

## 序

人間が、人間を取り囲む世界について知るといふ事實は、真理という概念と深く結び付いている。何故なら人は世界について「本当の」ことを知りたいと思うのであり、「間違つた」答えは望まないからである。また人は、世界についての「本当の」知識は、幾種類もあつてはならないと暗黙のうちに期待し、そしてその知識が一時的なものではなく、いつでも通用することを期待してゐるのではないだろうか。しかし常に真である唯一の知識を見つけないのは実は、そう簡単なことではない。それは世界を知るための我々の技術や理論がまだ十分なレベルに到達していないからではなく、上のような期待が素朴な期待のままであり、ある意味では非現実的な要求だからである。

それでは「本当の」あるいは「真なる」知識によつて意味されるものとは何だろうか。また我々人間にとって、真理への見込みのある道は与えられているのだろうか。代表的な哲学的立場は、實在論と反實在論である。ところ

がそのどちらも、実際は先のような期待を満たしてはくれないのである。そこで次章からは、それぞれ背景となる立場の違いによって真理概念の捉え方がどのように違うのか、どういう点で伝統的な二つの立場はこれらの期待に答えられないのかを示す。そしてより見込みのある道として、「常識的實在論」と呼ばれるパトナムのプラグマチックな實在論に沿った真理の位置付けを示したい。というのは伝統的な二つの立場の間をとるこの實在論こそが、より實在論的な態度を理解できるかたちで表していると信じているからである。

## 一、真理についてのアプローチ

### 一・一 實在論と対応真理説

真理の性質として要求されるものは何だろうか。科学において理論が真であるためには、それが自然現象を偽りなく記述することが望まれているだろうし、それによって発見された法則は、気まぐれではなく正確に現象を予測することが期待されているだろう。このような見方には、自然が我々人間の科学理論に従うのではなく、人間の方が自然のあり方を発見するのだという考え方が前提されている。つい最近発見された彗星は、その日突然誕生したのではなく、我々が発見する前からその軌道を運行していたのだと考える。自然のあり方は、我々の見方に従って、あれやこれやの仕方 で存在するのではなく、一つの決まった仕方 で存在しているはずだというふうになる。このように、世界のあり方やその中の事物、自然の法則といったものが、我々人間によって考えられたり観察されることから独立に存在するという見方が實在論である。この意味で實在論は、世界と我々人間の関係についての素朴な感想を表している。この立場では自然についての真なる知識とは、人の観念や認識の外にある世界を言葉で写したも

のということになるだろう。すると、世界のあり方とそれについての記述が一致したときに、その記述は真な知識だと見なされる。これは、真理は事実との対応を意味するという対応真理説である。ところが世界の本当のあり方が、人の認識の外にあるとすれば、人は決してその知識や理論が正しいかどうかを知ることが出来ないということになる。現に今の科学理論が世界を正確に記述しているのだという期待は、新たな理論が提出されるたびに裏切られてきた。しかし、どんなに理想的な理論でさえ、正しい理論だとは言えないという結論は、納得し難いものである。人の頭の中にあるものと、人が認識しえない外の世界とを設定するとき、真理としてのこれらの対応関係をいかに説明するかがこの立場にとつては課題である。

#### 一・二 反实在論・相対主義・真理の整合説

反实在論は上のような立場に対し、存在すら知られていない星についての知識が、真または偽であるということの意味をなさないと主張する。彼らにとつて、真理は、人間の観察や判断から独立に成立することはない。つまり言明が真であるかどうかは、それが主観的な枠組みの中で正しいかどうかの問題ということになる。これは真理の整合説である。しかしこのように主観的に設定される枠組みによつて真偽が決まるとすると、相対主義のいうように、真理は枠組みの数だけあつてよいことになる。ファイヤーアイベントは次のよう考えた。固定された方法という考えや固定された合理性の理論は、人間の見方やその社会的環境をあまりに素朴にしか見ていない。原始的な直観や明確さ、正確さ、客観性、真理というかたちの知的安心を満たすために、それら歴史から与えられた豊富な内容を無駄にしたくないならば、たった一つの原理しかないのは明らかである。それは「何でもよい anything goes」である。

こうなると、極端な場合、会話というものは全く成り立たなくなる。というのは、話し相手の背景とする枠組みが自分のものと違えば、何が正しいのかも違うことになり、果ては、互いの枠組みが同じかどうかすらも分からなくなるであろう。实在論が基本的に反対するのはこの相對主義である。相對主義をとれば、世界のあり方は人間の認識能力を越えているので知り得ないという實在論のジレンマは避けられるが、それ自身の抱える帰結も受け入れ難いように思われる。我々人間は、もっと確かな知識をもとにして行動していると考えたい。

### 一・三 指示と真理

有名な真理概念の定義がタルスキによって試みられた。例えば「雪は白い」という文が、真あるいは偽となる条件はどのようなものかを考える。単純に考えてこの文は、雪が白いときに真であり、白くないときに偽であるといえるだろう。そうすると、真理の定義は少なくとも我々のこのような考え方に一致するべきである。そこから次のような等値文が出来る。「雪が白い」が真であるのは雪が白いとき、かつそのときにかぎる。これを一般的に書き直すと次のようになる。

(T) Xが真であるのはPが真であるとき、かつそのときにかぎる。

このとき、「P」には、述語「真である」が適用される言語の任意の文が入り、Xにはその文の名前が入る。そしてその代入の為された個々の等値文は、その文の真理が成立する場合を説明する、真理の部分的定義を表すと見なされる。そこで真理の全体的な定義は、ある意味で、これら全ての部分的定義の連言となる。

この定義は、前項で見てきた実在論と反実在論の問題を解決してくれるだろうか。ところがそうではない。あるお伽話を想定してみよう。

むかしある国「A」で金持ちの美食家たちが集まって「美食アカデミー」なるものを創ったとする。そこでは彼らは美食への飽くなき欲求を満たすべく調査研究を重ね、常に食文化に関して厳しい目を光らせている。そこでは食に関して正しい批評をすることが義務付けられている。

そこにあるとき、他の国から婦人がやってきて、彼らと昼食を共にした。そして食後のお茶を飲みながら、こう言ったとする。「今日のデザートは砂糖が少なかったので殆ど甘くなかった」。するとアカデミーの会員たちも同意する。今日のデザートはとても淡泊なもので、砂糖も殆ど使われていなかったことである。ところがこの婦人の国では、何らかの理由で永年食について他国の人々と語ることの少なかつたこともあって、砂糖と塩、甘いと辛いという概念がA国の常識とは全く入れ代わつていたとしよう。彼女の国で「砂糖」と呼ぶ白い顆粒はA国では「塩」であり、A国の「砂糖」は「塩」と呼ばれる。そしてA国のアカデミー会員が「甘い」と感じる時には、彼女は「辛い」と言い、A国人が「辛い」と感じる時には、彼女は「甘い」と言うのである。従つて、彼女も「砂糖は甘く感じ、塩は辛く感じる」と言うのであるが、彼女がその様に言うとき、彼女らの味覚自体はアカデミー会員と同じであるにもかかわらず、A国の表現で言うなら全く反対のものを指していることになる。彼女らは、砂糖を指ししながら「塩は辛い」と言うであろう。このとき彼女の先のデザートについての言葉「砂糖が少なめで甘くなかつた」は、真といえるのだろうか偽となるのだろうか。

またあるとき、天の邪鬼がアカデミーを訪れたとしよう。驚いたことに彼の苦みの強弱についての感覚は、A国一般人と逆転している。彼は、A国人が苦いと感じるときほど苦みを感じず、A国人が苦みを感じないときには、

彼はより苦いと感じるのである。加えて彼は天の邪鬼の本性上、(彼が)苦いと感じたならそれを「苦くない」と言い、(彼が)苦くないと感じたなら「苦い」と言うのである。このとき天の邪鬼とA国人の苦みについての感想は、常に一致する。それは、天の邪鬼の感じ方がA国人のそれと全く逆転しているにもかかわらずである。このとき天の邪鬼が言う「ホップのきいたビールは苦い」は、真なのか偽なのか。

そこでタルスキの真理概念の定義をあてはめてみよう。第一の場面の等値文は、

- (1) 「砂糖控え目のデザートが甘くなかった」が真であるのは砂糖控え目のデザートが甘くなかったとき、かつそのときに限る

となり、第二の場面では、

- (2) 「ホップのきいたビールが苦い」が真であるのはホップのきいたビールが苦いとき、かつそのときに限るようになるだろう。

タルスキによれば、真とはこのような文の連言によって表されるはずだが、何れもタルスキの条件は満たすが、上の例のどちらも、何が甘いのか、何が苦いのかを教えてくださいはしない。つまりタルスキの丁規約は、文中のXが実際のものかどうか対応しているかは問題ではないのである。

そこで例えば、上の甘さの指示が、A国人一般の指示と逆転しているかどうかを確かめるために、「この『デザートは甘い』と指さして言つて、皆で味見をすれば、彼女の言葉使いが逆転していることは確認出来る。しかし天の邪鬼のような例だと、どちらの感覚を本当に苦いというのかは、恣意的な選択の問題となる。指示の固定は因果的に指示することによって可能だが、それは単に語と世界の対応をつけるだけであつて、指示された対象が何であるかの決定的な説明を与えてくれるものではない。

## 二、形而上学的実在論の立場と対応真理説の問題

### 二・一 形而上学的実在論の定義

対応説をとる実在論の立場を極端に形式化したものが形而上学的実在論の立場であるといえる。パトナムは形而上学実在論の主張を次のようにまとめている<sup>3</sup>。

- ① 世界は、固定された、心から独立の対象の総体からなっている。
- ② 唯一で完全な世界のあり方についての記述がある。
- ③ 真理は、語や思考記号と、外的な物や物の集合との間の一種の対応関係からなる。

またアンダーソンは形而上学的実在論を次の三つの関与の連言だと定義する<sup>4</sup>。

- (M1) 対応真理：真理は、言語の一部と世界(物自体的実在)の間の対応関係である。言明が真であるのはそれが物自体的実在に対して(唯一の)対応関係を持っているとき、かつその時に限る。
- (M2) 意味論的実在論：具体的な対象(中ぐらいの大きさのそして理論的な)への存在論的関与を表す言明は、心から独立の存在の本質的性質によって、従って、それを得ることは人間にとってアクセス不可能であるかもしれない条件によって、真か偽のどちらかである。

(M3) 存在論的実在論：全て(殆ど)の二〇世紀の科学や常識によって承認された対象は、どんな心からも独立に存在する。

これらを要約すると、実在世界を認識不可能なものと考えると同時に、真理を実在世界とその記述の対応と考える

立場だと言えるだろう。パトナムによれば、このように定義される形而上学的實在論の立場は、真理と指示に関して次のような問題を含んでいる。

## 二・二 形而上学的實在論批判

具体的には問題は二つある。1つは既によく知られた議論で、a. 意味の理論において、指示概念を予め設定しておかなければならないこと。そしてもう一つは、b. どんなかたちであれ、言語に対応する予め決まった対象がありえるのかというものである。

a. 先に定式化されたような形而上学的實在論をとっている場合、真理は、文と事実との対応関係を表す性質と言い換えることが出来るだろう。その際二つの立場が考えられる。一つは、語が指示対象を指示するという関係については、それ以上還元不可能であり説明されない概念で、非自然的な能力だと見なす「プラトニズム」であり、もう一つは、非自然的な力を仮定せずに古典的な真理の対応概念を維持しようとする「穏健な實在論」である。この議論はパトナムの「モデルと實在」や「理性、真理、歴史」でなされているが、ごく簡単に要約すれば次のようになる。語と指示対象の関係の決定（解釈）は普通、理論的制約と操作的制約とによってなされると考えられる。しかしクワインが指示の不確定性を示したように、これらの制約だけでは指示の確定には不十分である。さらにレーベンハイム・スコレムの定理を用いると、算術の非標準的モデルの存在を許す定理ができることから、パトナムは、どんな言語でも非標準的解釈を持ちうることを示す。そしてそれに理論的・操作的制約を加えても、指示は確定できないということを示すのである。つまり形而上学的實在論者が信じているような一対一の対応は、「穏健な實在論」が願うようには決定されず、非自然的な力に頼らない限り、説明出来ないというのである。この



ような非認識的世界と真理の対応説を維持しようとする時生じる問題を、「水槽の中の脳」の想定が視覚化している。<sup>5</sup>

全く感覚器官を持たず、脳だけが、水槽の中で生かされている状態を想定する。この脳には精密なコンピュータのプログラムによって信号が送られ、脳自身には我々人間の日常と変わらない刺激や情報が与えられているとする。このような場合、水槽の中の脳は、言葉によって我々人間と同じように何かを意味する、指示するということが出来るだろうか。パトナムは出来ないと言う。その理由は、この脳の話す言葉には、実在との関りが無いからである。彼らは現実の対象との経験を持たず、入力は常にコンピュータのプログラムによるものでしかない。彼らはそれに応じて単に信号のやり取りを行っているだけで、コンピュータ内部のものを越えて言及することが出来ない。そこで、たとえ周りの世界が滅亡しても、水槽脳だけは何事も無かつたように、平穏な生活が続いていると信じていることもありえる。つまり、彼らが「我々は水槽の中の脳である」というとき、それは水槽の中の脳のイメージでしかない。しかし「イメージとしての水槽の中の脳」は、少なくとも普通の人がこの文で意味するものとは違うだろう。更に、地球上の全員が水槽の中で生かされている脳であるとなると、水槽脳の言うことの不自然さは、はつきりする。というのは、「我々は皆、水槽の中の脳である」と言うとき、本当に地球上の全員が水槽脳であるならば、実際それを見ることは、「神の視点」でも想定しない限り不可能だからである。ところが水槽脳の状況はある意味で、外界にある対象は、それが認識されることとは関係なく存在するが、語と指示対象の関係は既に確定していると考えられる形而上学的実在論者の立場と同じである。つまりこの例が示すのは、真理を、我々の言語と認識不可能な外部世界との対応と考えるなら、プラトニストのように非自然的な指示の能力を想定しない限りは不可能だということである。そして非自然的な力を否定するならば、形而上学的実在論の前提は間違っていることになる。

b. 真理として、外部世界とその記述との対応を考えると、形而上学的實在論の立場では、何か全く純粹な、つまり我々人間の認識や判断からは独立の対象、言い換えれば、物自体の世界を想定している。ところがこの物自体というものは、少なくとも我々人間にとってはありえないというのが、パトナムが形而上学的實在論に反対するもう一つの理由である。パトナムは形而上学的實在論に代わる主張として内部實在論を提出した。内部實在論では現実の人間の関心を反映している様々な視点だけがあり、その概念的枠組みから独立に対象が存在することはない。この立場では、真理とは正当化の一種である。ある事柄についての記述とは、その事柄に対する正しい説明であると考えられる。そのときこの説明文が真かどうかを言う以前に、その説明が見当違いのことを言っているなら、説明たり得ないであろう。そして見当違いかどうかを決めるのは、我々の関心以外にはない。つまりある言明が真かどうかは、その時の関心や概念的枠組みに沿ってその説明が正当化されるかどうか、説明として受け入れることができるかどうかということなのである。従って、「価値を伴わない存在には事実もない」と言われる。

ラッセルは知覚を説明するためにセンスデータを考えたが、このような純粹な感覚与件さえも、実は存在し得ないとパトナムは考える。この視点から内部實在論を發展させたものが、彼の新しい用語で言えば「常識的實在論」である。ある人が日本語を話しているのを聞く時、日本人の私がそれを聞くのと、日本語を知らない人が聞くのでは、どこまでを言語として聞くのか、どこまでを雑音として無視するのかというような点で違ってくるだろう。声を聞く段階で、既に解釈が始まっているのである。そうすると、單純な感覚でさえも文化や習慣、解釈を既に被っており、個人の頭の中に現れる純粹な感覚は、存在しないと考えられる。パトナムはそこで「心は頭の中にはない」という。

## 二・三 水槽の中の脳について

さて、もう一度ここで水槽の中の脳について考えてみよう。水槽の中の脳の設定は、実際に形而上学的實在論者の立場を忠実に反映しているだろうか。

「我々は、皆水槽の中の脳である」と言うためには、神の視点を持ち出さなければ不可能だというのは正しいのだろうか。もし水槽脳のコンピュータが、様々なセンサーやカメラとつながっていて、そのデータを水槽脳に与えていたらどうなるだろう。あるいは普通の知覚を持っていた人が、実際に自分以外の人間たちが次々と水槽脳になつたことを見て、「我々人類は皆、猿の惑星の猿たちによつて水槽脳にされてしまった。私が最後の被験者で、麻酔をかけられたところまでは覚えていたが……」と言つた場合、そして彼が麻酔をかけられた後、水槽脳にされたことが間違いないとして、それでもこの発言は意味のないものなのだろうか。あるいはある人が、テレビでしかカモノハシを見たことがないとしても、それについていろいろ話すことに意味はあるだろうし、実際のカモノハシを見ても、カモノハシだと分かるだろう。このように考えてみると、水槽脳の仮定には、何か不十分なところがあるように思われる。形而上学的實在論者に課されている問題と、水槽の中の脳を厳密に類比させるなら、「水槽脳には、コンピュータプログラムの信号の意味（プログラムに水槽や脳という概念が組み込まれていたとして）が、水槽の中の脳の彼らが『水槽』や『脳』と解釈するものと本当に同じなのか（一致しているのか）が解らない」とみるのが正しいのではないだろうか。形而上学的實在論は、外からの刺激を否定しているのではなく、正しいか（対応しているか）どうかは知りようがないと言っているだけである。水槽脳の語の指示対象は、必ずしもイメージではなく、外部の物を指していると主張したとしても、水槽脳による水槽脳の指示が、なぜ成功しているかの説明にはならないかもしれないが、少なくとも自己論駁的ではない。

確かに指示の固定を非自然的な力に頼ることは實在論者の望むところではないだろう。しかし「我々（主観）のみが世界の中心ではないのだ」というのが、實在論者の言いたいことの一つではないだろうか。

こういった疑問に関して、パトナムも「水槽の中の脳」の話については、ある仮定が誤っていたことを認めている。つまりそれは機能主義の前提<sup>10</sup>があったことである。水槽脳になると外部からの刺激は無視され、脳に対する刺激の入力は、全てコンピュータのプログラムによって与えられると考えられていた。それを考慮すれば、外部の知覚に関する疑問のいくつかは解消されるだろう。水槽の中の脳の想定は、幾つかの問題を含んではいるが、形而上学的實在論者の立場と意図について考えさせるのには、十分役目を果たしてはいるだろう。

#### 二・四 救われるべき實在論の直観

二・二で見えてきたように、實在論の極端な形式化である形而上学的實在論の立場にはいろいろな問題があった。この分析によれば、彼らに残された道は非自然的な力を認める「プラトニズム」しかないのであるが、もちろん「プラトニズム」は、彼らにとつて納得のいく立場ではない。もし形而上学的實在論者が反論するなら次のように言うだろう。「我々が正しいことを言っているかどうかを、何かによつて（神の視点であれ何であれ）保証される必要があるだろうか。我々は我々のやり方でうまくやってきたのだ。多くの場合、外部世界の対象の認識と見なししてきたものによつて知識を得ているのではないのか。感覚がたまに間違ふことがあるとしても、全てを疑う必要があるのか」。

パトナム自身、實際形而上学的實在論が何を言おうとしているのかを捉えるのは難しい<sup>11</sup>と認めている。また、もともと實在論が真理の対応説に期待したことは二・二で定式化されたような形而上学的實在論を守ることはない。

彼らは無理な要求をしているのではなく、素朴な態度を述べたに過ぎないのである。それなら実在論の精神はどのように表現出来るだろうか。仮に次のようにまとめられるだろう。

- (1) 真偽は、ある公共的制約によって確定する。
- (2) 相対主義を認めない。

問題は、実在論は、自らの主張を正当化する道を知らなかったということである。その限りで実在論は、「プラトニズム」をしぼしぼ呑み込まざるをえない状況にある。しかし、もし指示を決定する非自然的な力に代わる制約や規準が見つかり、それが必然的、あるいは少なくとも、我々人間に共通の合理性や概念枠として、見逃すことのないものであるとすれば、実在論にも生き残る可能性は十分あるだろう。それでは見込みのある道は、どのような特徴を持つべきなのか。パトナムがとりあげる哲学者との関連で見ることにしよう。

### 三、常識的実在論の真理

#### 三・一 カント・ヴァイトゲンシュタイン・プラグマチズム

##### a. カントとヴァイトゲンシュタイン

パトナムは内部実在論を主張し始めた頃、しきりにカントを引用している。パトナムはカントについて、「世界を記述することは単にそれをコピーすることではない」と気付いた最初の哲学者だと見る。カントの経験的実在論によれば、世界における物自体と現象の關係は、因果關係として捉えられるが、それがどのようなものかは分からないし、現象どうしの因果は確認できるが、物自体は、それが確認された時点で現象となってしまうので確認でき

ない。それ故世界の記述は、人間の概念選択によって形づけられたと考えられるのである。但しパトナムは、カントの主張のうち、空間、時間、因果などは経験のアプリオリな条件であるという考えは否定している。従って、内部实在論の真理はアプリオリに決まったものではない。

パトナムの内部实在論の主張について、アンダーソンは先に挙げた形而上学的实在論の定式化 (M1) ~ (M3) を示しながら次のように説明している。つまり内部实在論を主張することによって、パトナムは (M1) を広い意味での整合真理説に置き換え、(M2) を理想化された検証主義意味論に明け渡し、(M3) をカントの伝統による観念論的な経験的实在論で置き換えた。<sup>12</sup> パトナムはその後、自分の立場を「常識的实在論」と呼ぶが、それは (M2) の検証主義意味論に対する態度を、知覚に関する概念を明らかにすることによって改良したものとみてよいだろう。

カントもヴィトゲンシュタインも、世界については語れないものがあり、それについては何も言うことが出来ないと言っている点では、同じことを主張しているようにも見える。そこでパトナムが両者の考え方の違いとしてあげているのは、物自体が語れないというときに、カントは認識的に知り得ないと言っているのに対し、ヴィトゲンシュタインは「物自体」という概念そのものが成立不可能だと見ていることである。パトナムが常識的实在論を主張してから、カントよりヴィトゲンシュタインを重視するのはそのためであろう。ヴィトゲンシュタインは、言葉とそれが示すものの関係について、語と指示対象の単なる対応関係という説明を越えて、指示対象は、言語の決定的な意味ではなくその特徴の一つだと見なした。それは可能であるためには、区分化された背景 (言語学的、規約的、社会的などの) を必要とする。人は言葉を使う上で、こういった制約を逃れることはできないのである。「ゲーム」という語の意味が、家族的類似でしか表されないように、語に対応する予め決まった対象は存在しない。

しかし何でもよいのではなく、その時その時に適応した意味は必ず存在していると考えるのである。

b. プラグマティズム

實在論と反實在論は、共にそのままのかたちでは、真理についての決定的な説明を与えることが出来なかった。真理が超越論的關係と捉えられるなら、それを知ることとは原理上不可能である。そうすると、真理は、何らかの規約や概念枠に従って決まるとしか言えないだろう。しかしある事柄に関して、それぞれの枠組みごとに違った主張がなされ得るといふとき、それらを同時かつ同程度に真な主張とみることに抵抗を感じる。もしある事柄についてその肯定と否定を同時に主張するなら、その事柄について何も言っていないのと違わないだろう。それでは我々が納得出来る枠組みとはどのようなものだろうか。實在論にまだ望みがあるとすればそのための方策は、この實在論に、理論的制約と操作的制約の他に、新たな適当な制約を与えてくれるものでなければならぬ。

プラグマティズムは一つの提案である。W. ジェイムズは、思想は、我々の他の経験との満足できる關係に、我々を至らしめるのに役立つ限りで真であり、それが自分にとって何の役に立つかどうかということであると見なしている。一方、目の前の経験に役立つからといって将来の全ての経験を満足するとは限らないのであるから、真理は永い目で見て、そして全体の過程を通じて役に立つことであるとして<sup>13</sup>いる。

さて、ここで真かどうかを気にしているのは、我々人間である。かつ人間は言葉を使って考えを表現するのであり、言葉はそれを使う者に共通の規則にしたがって用いられる。つまり真理は人間の協同的関与から独立ではありえない。これは認識のレベルにさかのぼったとしても同じことである。ある考えでは、センスデータなる主観を介さない純粹な認識があるとされるが、先に見たように、感覚知覚ですら我々日常の習慣や経験の影響を受けている。言い換えれば、感覚ですら協同的なのであるから、もの「それ自体」の経験やものの本質と言われるものはあり

えない。従って、それ自体の「対象」、それ自体の「存在」、それ自体の「真理」という概念も存在しない。どういう意味で「対象」という語を使っているかが決まらなければ、その対象に関する「真実」や「存在」について何か言ってみても意味がないのである。それぞれの対象はそれぞれにふさわしい言語で語られてこそ意味がある。それ故「認識から独立の世界」という概念は、「世界」が世界自身の言葉を話すことが不可能なのと同様に、ありえないのである。真理といっても「人間的道具であり、空から降ってきたものではない<sup>14</sup>」。従って、見込みのある実在論とは「『それ自体』という概念に訴えることなしに、我々の科学や芸術のそして他の体系を、我々の馴染みのある常識の体系と同様に採用する見方<sup>15</sup>」でなければならぬ。人の知りうるものは、我々人間の基本的な制約を越えてはありえない。科学は科学の言葉で、法律は法律の言葉でしか語れないのと同様に、我々人間の知る世界は、我々の言葉でしか語れないのである。

確かに、記述されていない実在世界は存在する、と考えることは可能である。しかし、記述しようとすればまた概念枠を設定することになるのであるから、全ての概念から独立の事実が何であるか、という考え方は意味をなさない。ヴァイトゲンシュタインが援用されるのはこの意味においてもある。

### 三・二 相対主義ではない・通約不可能性をどう解決するか

真理概念が知識の獲得にとつて重要なのは明らかである。しかし、トートロジは論理学では最も重要な概念の一つであるが、日常では同語反復の域を越えられれば良い方である。すると、論理学における真理と日常のレベルにはギャップがあるようにみえる。科学やその他の領域においても、言葉がその領域内で定義されているとするならば、哲学の議論もこれと同じギャップを逃れているという理由は何も無い。しかし、パトナムがこれを常識的実



在論で認めるならば、相対主義を認めることにならないだろうか。常識的実在論が相対主義と違うのは、真理をそれぞれの概念枠の中での相対的な正当化と見なすのではなく、真理と合理的受容可能性の間には相互依存性がある<sup>16</sup>と見なし、人間ならば共通に合理的に理解出来る枠組みによって捉えようとする<sup>16</sup>ことにある。科学の概念枠と日常の概念枠というような二分法的枠組みを設定し、日常の存在は事実とは違うのだといった考え方をそもそも認めないのである。そうすると、概念枠が決定されると、その中の真理が決定されると同時に、他の概念枠からでもその正当性は理解することが出来るのである。

たった3つの個体からなる世界をモデルとして考えてみよう。「この世界にはいくつの対象がありますか」という問いに対して真なる解答は、カルナップ流の論理を採用する人なら「3つ」であるし、ポーランド論理学風に部分論的合計 (mereological sum) をとるなら「7つ」となるだろう<sup>17</sup>。このときそれぞれの枠組み内では答えが確定している。また3つや7つ以外の解答を同様に正しいと言うことは許されない。そして互いの枠組みによる解答もそれぞれ理解することが出来るのである。2つの異なる主張の持ち主は、必ずしもそれらの主張の連言を否定する訳ではない。つまり両者の「真理」は通約可能であり、理論間にまたがる真理概念が可能なのである。これに対して相対主義だと「真理」概念は、その都度違ったものであつてよい。ところがそうして通約不可能をとるならば、彼らが何について共通概念がないと言っているのかすら理解不可能になってしまうだろう。というのは、当然彼らは「真理」について語っているはずなのだが、彼らには共通の真理概念がないのだから。

さらに、科学の進歩や知識の蓄積を説明するには実在論が必要である。科学理論のパラダイムが変わると、語の指示対象も違うというのであれば、科学の進歩、あるいは単に過去のものについても話すことができなくなる。「アインシュタインの出現により、『運動』が『質量×速度』ではないと証明された」という文章が教科書の中に出

てきたときに、この「運動」を古典的な概念でとるならば、アインシュタインは矛盾を主張したことになる。このようなことから、「運動」は昔の定義でも使われても、現在のものでもよいというものではないのである。<sup>18</sup>「昔は『運動』についてこう考えていた」という文が意味をなすためには、指示を固定する必要がある。その点でも常識的实在論は、实在論の直観を守って相対主義を逃れているだろう。

### 三・三 パトナムの实在論の一貫性・パトナムは裏切り者なのか

デヴィットはパトナムが内部实在論を主張したとき、实在論者に対する裏切り者だと呼んだ。<sup>19</sup>もしパトナムが常識的实在論を提出することで内部实在論も覆したのであれば、二重スパイの刑は逃れられないだろう。しかし、より基本的な精神において一貫性が見られるとすれば、この容疑は晴れるはずである。そこで今まで見てきた实在論の精神に注意することが重要である。パトナムの主張では、相対主義を避けること、真偽の決定は公共的な見方でありえないことの二つは常に守られてきた。例えば、内部实在論を提出する前の論文「意味の意味」では、「環境の寄与」や「社会的協同」の働きとして「ステレオタイプ」というベクトルを持ち出しているし、内部实在論の「理想化された合理的受容可能性」も同様の精神を保っている。また常識的实在論でも、確定した事柄との対応を否定しながら、人間の協同的な制約による真理の説明をしているのである。

誤解を招きやすいのは、パトナムが「意味の意味」で指示の因果説を持ち出していることである。しかし「意味の意味」での指示の因果説は、指示の理論というより、記述以外の方法で、指示の固定が如何になされるかを示したものであって、むしろ指示の特定に関する「社会的協同+環境の寄与」を強調した理論だと解釈すべきものだろう。彼が「ステレオタイプ」の概念を持ち出したのはそのためなのだから。

ステレオタイプとは、その言語社会において、語 X が何を意味しているか知っている、あるいは語 X を習得していると言われるために必要な要素のことである。例えば「虎」という語に対しては「縞がある」「大猫風」といった特徴のことで、それらは語の分析的意味でもなく、その自然種の理想的特徴でもない。それは話題によって厳密さの程度が変わるといふ点でプラグマチックな要求である。このように初期の論文においても、語の指示の決定に關して、個人の心理状態というよりも、「必要とされる最低レベルの能力の性質は、文化と話題に強く依存している」<sup>20</sup> というように、社会的性格を強調しているのである。ここでも、語の外延を決定するものとしての「意味は個人の頭の中には無い」。

#### 四、まとめ

##### 四・一 言語・コミュニケーション・真理

「真理」といえども我々人間が使ってきた言葉の一つにすぎない。そして言語がコミュニケーションの手段として発達したのである限り、そのあり方はプラグマティックでしかありえないのではないだろうか。その域を越えるものを要求することは言語に過大な期待をすることである。論理的思考が言語構造に負っているというのは、ある部分そうかもしれないが、論理的思考の起源が言語構造にあるとすることには必然性が無い。言語はなくてもコミュニケーションは成立する。それ故、言語が、人間の論理的思考を忠実に反映しなければならぬという必然性はない。人間の論理的思考が言語を介する必要があるのと、言語が論理の規則を厳密に反映することは、別の問題である。

文の真偽は人間に認識されなくてもあるとは考えられる。しかし真理概念は人間がいなければ存在しないだろう。真理は言語に関係するものであり、言語とは、我々人間が作り出すものでありまたその需要に応じて変化していくものである。そこから考えられるのは、言語の使用者が人間であることが、真理を規定する制約となっており、また人は、この言語の持つ性格による制約を越えることは出来ないということである。それ故、真理の基礎は協同的性格を持つている。ヴィトゲンシュタインは『哲学探究』で、「もしライオンに話ができたとしても、我々には理解できないであろう」と書いている。ライオンにとつての真理（もしあったとしても）がどのようなものを、人間が記述することは不可能であり、またどちらの方の真理が正当だとも言うことは出来ないのである。ヴィトゲンシュタインは、知覚の言語に対しても同じことが当てはまることを、次のようにも表現している。

「それだからあなたは何が正しく何が誤っているかを人間の一致が決定するといっているのだな。」——真であったり偽であったりするのは人間が言うことである。そして人間が使う言語において人間は一致するのだ。それは意見の一致ではなく、生活様式の一致なのである。（強調原著）

もし言語がコミュニケーションの手段となるのであれば、諸定義の一致だけではなく（非常に奇妙に響くかもしれないが）諸判断の一致がなければならぬ。このことは論理を破棄することであるように見えるが、しかし論理を破棄している訳ではない。——測定方法を記述するのは、一つのこと、測定結果を見て話すのは別のことである。ところが、我々の測定と名付けているものは、測定結果のある種の恒常性によっても決定されている。

パトナムは、真理は「言われていることの正しいness of what is said」だと言う。この正しさという概念は、考えてみれば何かにとつての正しさでしかありえない。そしてその正しさを語るのは人間である。ある事柄にいろいろな要因があるとき、恒常的に見える側面だけを報告することは、正しい説明と言えるだろうか。正しく見えるだけでなく、最良の説明でなければ実際のところ役に立たないのである。「ニューズウィーク」誌は雑誌であり、紙であり、情報源であり、暇つぶしでもあるだろう。どれか一つでなければならぬものでもないし、全てというものでもない。あるいはそれぞれの場合に対応する連言や選言の束でもない。というのも「すべての場合（連言あるいは選言の「束」という意味での）」という「一つの状況」や、それを見る視点はありえないからである。

何がそのものにとつて本質的と考えられるかは、状況によつて異なる。それに対して、恒常的にみえるところだけをとりうとしたのが形而上学的實在論であり、それぞれの役に立つところを強調したのが相対主義であつたといえるだろう。真理はそのどちらかだけでは説明されないのであつて、パトナムは、このような二分法的説明を排除し、全体としての真理の性質を述べようとしている。それが「實在の真であるヴァージョンが一つには限らないと認めることは、偽であるヴァージョンが無いという事ではない」、「真でないなら偽であるというような」二分法を捨てることは何でもありの文化相対主義や、すべての概念図式は、他のものと同等によいという考えに降伏することではない」という表現で言いたいことなのだろう。

パトナムは「言語がいかにして世界をとらえるのか」という関心に始まる問いに対して、常識的實在論と言うプラグマチックな解答を与えた。相対主義を避け、かつ人間に共通に理解できる規準によつて、真理を維持しようとするのが實在論の精神であり、また人間にとつては、それ以外の規準はありえないという考えが正しいなら、常識的實在論は、實在論の元来の精神を最もうまく代表しているものの一つであるだろう。

## 註

1. Feysabend, P. (1977) *Against Method*, p. 27. 参照。
2. Tarski, A. 'The Semantic Conception of Truth', *Readings in Philosophical Analysis*, (ed. H. Feigl and W. Sellars), p. 54. 参照。
3. Putnam, 1981, p. 49. 参照。
4. Anderson, 1992, p. 51.
5. 詳しき議論は、Putnam, 1981, の第一章にある。
6. Putnam, 1981, p. 201.
7. Putnam, 1995, p. 79.
8. ただしどういって見たからといって、猿たちが我々の指示関係を正当化してくれる保証はないし、さらに猿の指示と我々人間の指示が、同一の性格ものであるかどうかは、知る由も無いが。
9. Harrison, J. (1985). 'Professor Putnam on Brains in Vats', *Erkenntnis*, 23, pp. 55-57. 参照。
10. パトナムの機能主義への反省に関するコメントは、Putnam, 1992b, p. 356, 1994, pp. 456-61. などに見らるが、このような想定が可能であると思われたのは、知覚の問題を重視していなかったからだとする(Putnam, 1994, p. 465)。
11. Putnam, 1992b, p. 363. 参照。
12. Anderson, 1992, p. 51.
13. James, W., 1978, p. 106. 参照。
14. Putnam, 1987, p. 21.
15. Putnam, 1987, p. 17.
16. Putnam, 1983, p. 37. パトナムが初め内部实在論で、「真理を」理想化された合理的受容可能性」だと主張した時には、まだ真理条件意味論と受容可能性意味論という二分法的可能性があるように考えていた。常識的实在論では、その区別さえないと考えている。

17. 詳しく説明しているのは、Putnam, 1987, p. 32. を参照。
18. Putnam, 1992b, p. 375. を参照。
61. Devitt, M. (1983). 'Realism and the Renegade Putnam: A Critical Study of Meaning and the Moral Sciences', *Nous*, 17 (2), pp. 291-301. を参照。
62. Putnam, 1975, p. 204.
21. Wittgenstein, 1953, II, xi, p. 223.
22. Wittgenstein, 1953, §241 及び §242.
23. Putnam, 1992a, p. 77.
24. 引用の前置 (Putnam, 1983, p. 19) は、'パトナムが、内部实在論を、後者 (Putnam, 1987, p. 30) では常識的实在論と云ふ名称をそれぞれ掲げている時に書かれたものである。従って内部实在論、常識的实在論の基本的な思想は変わっていないと推察される。

#### 参考文献

- Anderson, D. L. (1992). 'What Is Realistic about Putnam's Internal Realism?' in "The Philosophy of Hilary Putnam", *Philosophical Topics*, 20(1), pp. 49-83.
- Ehbs, G. (1992). 'Realism and Rational Inquiry' in "The Philosophy of Hilary Putnam", *Philosophical Topics*, 20(1), pp. 1-33.
- James, W. (1978). *Pragmatism and The Meaning of Truth*. (one-volume edition) Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 中村春生 (1983) 「模範語林と本邦語の対比」『異語』七〇〇 (異語社)。
- Putnam, H. (1975). 'The Meaning of "Meaning"'. *Mind, Language and Reality*. *Philosophical Papers: vol.2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Putnam, H. (1981). *Reason, Truth and History*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Putnam, H. (1983). 'Models and Reality'. *Realism and Reason: Philosophical Papers: vol.3*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Press. (Original work published 1980) 邦訳『飯田隆他訳『實在論と理性』(勁草書房一九九二)。
- Putnam, H. (1987). *The Many Faces of Realism*. LaSalle, IL: Open Court.
- Putnam, H. (1992a). *Renewing Philosophy*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Putnam, H. (1992b). 'Replies' in "The Philosophy of Hilary Putnam". *Philosophical Topics*. 20 (1), pp. 347-408.
- Putnam, H. (1994). 'Sense, Nonsense, and the Senses: An Inquiry into the Powers of the Human Mind'. *The Journal of Philosophy*, 91 (9), pp. 445-517.
- Putnam, H. (1995). *Pragmatism*. Oxford: Basil Blackwell.
- Wittgenstein, L. (1953). *Philosophical Investigations*. (G. E. M. Anscombe, Trans.). Oxford: Basil Blackwell. 邦訳『藤本隆志『ウィットゲンシュタイン全集』8 (大修館書店 一九七六)。